

【2013 年度 岐阜大学サマースクール(受入) 総括と今後の課題】

8 週間コース参加学生	ルンド大学(スウェーデン)	17 名
4 週間コース参加学生	ソウル科学技術大学(韓国)	1 名
	木浦大学(韓国)	3 名
	計	21 名

第 26 回を迎えた今年度の岐阜大学サマースクール(受入、以下略)は、上記の 21 名を迎えて無事に開催した。一昨年度の東日本大震災および福島第一原発事故以降参加者が途絶えていたソウル科学技術大学から、久しぶりに参加者を迎えることができたことは喜ばしい。また、ルンド大学から定員を満たす 17 名の参加があったのも嬉しく思う。同大学では 17 名以上の希望者がおり、成績順に選抜したということで、選に漏れた学生の落胆を思うと胸が痛むが、諸事情から 17 名と定めている。木浦大学からは例年通り、3 名の参加者があった。

今年度に関して最初に特記しておきたいことは、大きな怪我や病気などのトラブルがなかったことである。毎回必ず自転車の利用等により、本人はもとより岐阜大学スタッフが心配し時間と労力を割く事態が発生するが、今年度はそのようなことがなかった。危機管理と安全指導に例年より力を入れたことが功を奏したのかもしれない。それらについては後述する。

今年度 8 週間コースは、6 月 3 日(月)から開始し、5 日(水)に開講式およびガイダンスを行なった。日本語授業等の実際のプログラムは、翌 6 日(木)から開始した。4 週間コースは、6 月 26 日(水)に開講式およびガイダンスをし、翌日から参加学生は授業等に加わった。

プログラムには、以下の内容が盛り込まれた。後掲の日程表を参照願いたい。

1. 日本語授業:毎週月～木曜午前(8:45～12:00)
2. 日本事情／文化講義・実演:全 3 回実施(能実演 6/19、狂言実演 7/10、相撲講義 7/17)
3. エクスカーション:美濃 6/13、土岐 6/24、相撲 7/18
4. 旅行:上高地・松本・馬籠宿 7/4～5、郡上 7/12～15
5. その他講義:交通安全教室 6/12、ホームステイ事前指導 7/8

これらの他に、ガイダンスや修了式なども行なった。以下、今年度の総括と次回以降の課題等を、学生からのフィードバックを参照しながら述べる。

学生フィードバックは、筆記アンケート(7/22 配付、7/24 回収)とまとめの会(反省会、7/24 実施)での口頭アンケートから得た。筆記アンケートは、過去の年度との比較のため、質問項目を大きく変えずに実施している。それに対して、まとめの会の口頭アンケートの質問は、その年度に特有の事柄についてであり、毎年度異なる。筆記アンケート集計結果は別に示す(配付時のミスにより、設問 V および VI については 2 名からの回答を得られなかったことを断っておく)。

## I 日本語授業

8 週間コースに参加学生を派遣するルンド大学とは、同大学日本語科教員を通じて、毎年度綿密な情報交換を行っている。それに加えて、昨年度末(2013 年 3 月)には、サマースクールコーディネーター 1 名がルンド大学を訪問し、サマースクール参加予定者について詳しく情報を収集した。

同大学教員によると、今回の参加学生の日本語レベルは、例年より若干劣るため、復習に力を入れてほしい

とのことであった。比較のために昨年度の例を挙げると、昨年度の参加学生は日本語力がかなり高く、使用教科書『中級までに学ぶ日本語』(研究社)が簡単すぎたのではないかとの感触を得た。その経験を踏まえて、今年度は同教科書がちょうどいいだろうと想定したが、難しいという反応が多かった。特に漢字にルビがないことと新出語彙が多いことで学生は苦戦していた。

日本語授業は月～木の四日間だが、上記の『中級までに学ぶ日本語』は月・火で用い、水・木は口頭表現を重視した『WEEKLY J book 1 日本語で話す6週間』(凡人社)を用いた。こちらはルビが多く、活動でも楽しく話せたことがよかったのか、高評価であった。口頭アンケートでは両教科書それぞれについて、来年度も同じ教科書を使っていいと思うか聞いたが、前者については「いいと思う:8、よくないと思う:13」で、後者については「いいと思う:20、よくないと思う:1」と、大きく異なる結果が出た。次回以降の参考にしたい。

授業担当教員については、一点新しい試みをした。昨年度までは、サマースクール全体を見渡すコーディネーターは日本語授業担当には入っていなかったが、今年度はコーディネーターも授業を担当した。学生の様子、特に授業での様子を詳しく知ることができたのは、プログラム全体を見渡す上でも有益であった。

授業スケジュールについても、新しい試みをした。今までサマースクールの日本語授業では筆記試験は実施せず、プログラム最後に口頭試験もしくは発表をすることで成績を出していたが、今年度初めてプログラム途中で筆記試験を実施してみた。今年度の学生が復習を必要としているという事前情報や、スケジュール上の調整により、試験の実施が可能となった。日本に来てまで試験かという反発があるかと思ったところが、口頭アンケートで面白い結果が出た。筆記試験があったほうがいいという回答が21名中16名に上ったのである。勉強のために試験が有効だと身をもって経験しているのであろう。学生の反応を確認できたのは大きな収穫であった。

試験に対して肯定的だったのと対照的に、宿題については、全員がないほうがいいと回答した。授業のあとはやりたいことが山ほどあり、宿題をする時間がないという理由である。毎週毎週一定の宿題が出るより、一度か二度の試験の前に、集中して勉強をすることが、サマースクール参加学生の望むところであることを知り、今後の日本語授業運営に大いに参考になった。

教科書については否定的な意見があったが、日本語授業全般については、「とてもよかった:9、よかった:11、普通:1」というアンケート結果を得ているので、概ね問題はなかったと考えている。今後も事前の情報収集に努め、適切な教材の選定、スケジュールの工夫を続けていきたい。

## Ⅱ 日本事情／文化講義実演

日本事情／文化講義実演としては、ワークショップ形式のものを能、狂言それぞれ1回ずつ計2回、相撲観戦の予習としての相撲講義を1回行なった。また、純粋な講義ではないが、日本の習慣や文化を知るという意味においては、交通安全教室と郡上プログラム前日のホームステイガイダンスも授業的な意味合いがある。

能のワークショップは、「平成25年度岐阜大学活性化経費(教育)」を得て、留学生センター行事「留学生と日本人学生のための日本文化ワークショップ(郡上踊りと能楽)～踊って、謡って、体験して～」の一部として実施した。この日本文化ワークショップは、5月に郡上踊りのワークショップ、6月に能のワークショップを開催したもので、留学生・日本人学生を問わず岐阜大学の学生は誰でも参加可、教職員も自由に参加できる。6月の能のワークショップにサマースクール参加学生も加わるという形である。

講師として、観世流シテ方味方團先生・同田茂井廣道先生をお招きして、能「石橋」の実演、能の歴史の講義、能面の紹介、謡の体験、能のしぐさの体験、能楽器の体験、能装束の実演と、盛りだくさんの内容を提供

いただいた。能装束の着付けモデルとなれるのが、サマースクール参加学生の特権である(ただし1名のみである)。着付けモデルの学生は、今回も華麗な姿に変身を遂げた。

狂言のワークショップは、大蔵流狂言方山口耕道先生・同茂山良暢先生にお越しいただき、サマースクール参加学生と日本語・日本文化研修留学生(日研生)が受講した。狂言の笑い方でまず大声を出し、それから謡やセリフの体験、狂言のしぐさを使ったワークショップ、「寝音曲」の実演まで、笑いの絶えないワークショップとなった。昨年度も書いたが、このワークショップも能のワークショップと同様に広く学内に開放したいものである。日程と会場の問題がクリアされれば、能と狂言と同日に開催できないかと調整を試みたが、今年度は残念ながら不可能であった。次年度にやりがいのある課題が残されたにとらえ、更なる一步を踏み出せるよう準備を整えていきたい。

### Ⅲ エクスカーション・旅行

本プログラムの重要なコンセプトのひとつ「地域密着型志向」を、今年度も大切に考え踏襲した。以下の美濃、土岐、郡上の各プログラムは、今年度も好評であった。

- ・ 美濃エクスカーション:午後からの日帰りプログラムで、浴衣の着付けと和太鼓体験を実施。
- ・ 土岐エクスカーション:午後からの日帰りプログラムで、陶芸体験(轆轤及び絵付け)を実施。
- ・ 郡上プログラム:郡上八幡国際友好協会(GIFA)、郡上市役所はじめ郡上の皆様のご協力を得て、3泊4日で実施。文化体験(茶道、小学校訪問、郡上踊り、書道、剣道)とホームステイ。

エクスカーションとしては、県外ではあるが、これらに加えて大相撲名古屋場所観戦と上高地・松本・馬籠宿を巡る一泊旅行がある。いずれも高い評価を得ている。

一泊旅行は、昨年度から上記の訪問先にしている。一昨年度は上高地・高山・白川郷、それ以前は京都を訪問先としていたが、京都はプログラムに盛り込まなくとも自分たちで行く学生が少なくないこと、高山と白川郷は郡上ホームステイのときにホストファミリーが連れていくことが多いことから、一泊旅行の訪問先から外した経緯がある。現在の訪問地について満足度は高かった(とても良かった15名、良かった5名、普通1名)が、滞在期間が短い4週間コース参加学生や、自費で京都に行く余裕のない学生からは、やはり京都が良かったという声もあった。ホストファミリーと高山や白川郷へ行った学生は、確認できただけでも参加学生の半数に上り、やはり旅行先からは外して良かったと考えている。全員に100%の満足を与える旅行プランは不可能だが、この2年の経験から、現在の訪問先をしばらくは踏襲しても良さそうだとの感触を得ている。

郡上プログラムは、本サマースクールの白眉といってもいい要素で、各文化体験、ホームステイともにアンケートで高い評価が出ている(たとえば、ホームステイについては、「とても良かった:14、良かった:6、普通:1」)。昨年度からプログラム内容に余裕を持たせたため、一昨年度まで続出していた「疲れた」という学生からのフィードバックは皆無であった。今年度は、自由時間に参加学生を危険の少ない川辺に案内し、希望者は川遊びでリフレッシュできるように郡上八幡国際友好協会(GIFA)の皆様にご配慮いただいた。郡上ならではの美しい川を、見るだけでなく入ってみて堪能するというのは、なかなか他ではできない体験であろう。

郡上プログラムについては、GIFAの皆様が大変お世話になっている。今年度は、非常に厳しい食事制限をしているベジタリアンの学生がおり、果たしてこの学生を受け入れてくれる家庭があるかと非常に懸念していた。事前にコーディネーターが郡上に赴き、この参加学生について説明をし、祈るような思いでホストファミリーが見

つかることを念じていたが、幸い理解あるご家庭に受け入れてもらうことができた。また、受け入れる学生について細やかな心遣いを事前からして下さるご家庭が数多く、こちらとしても問い合わせには誠心誠意答えた。このようにお互いの顔が見える関係が構築され連絡を密に行えることが、いかに恵まれていることがつくづく感じた。岐大としては、素晴らしいホストファミリーの皆様にご協力いただき、郡上の皆様にとっては身元の確かな留学生を家族の一員として迎えらるることを喜んでいただき、お互いにメリットを感じながらこのプログラムを続けていきたいと強く願っている。

#### IV 危機管理・安全指導

昨年度のサマースクールで、プログラム最終日に自転車事故に遭った学生がおり、保険手続き等の事後処理に、プログラム終了後にもかかわらず、必要以上に当該学生の所属校と岐阜大学が巻き込まれるという事態が生じた。思わぬ事故や病気は不可避であるが、それが起きた時にどうするか、今年度は昨年度のケースを踏まえて対策を講じた。サマースクール参加学生の危機管理と万が一の事態の対応は、昨年度末(2013年3月)のルンド大学出張の主たるトピックのひとつでもあった。

今年度危機管理と安全指導に関して試みたのは、以下の4点である。

##### ① ルンド大学における保険手続き指導

昨年度自転車事故に遭い、保険手続き等が長引いたのがルンド大学の学生だったため、今後同様のケースが起きた場合どうするかルンド大学と話し合いを持った。スウェーデンの学生は、全員国の旅行保険に入っているため、怪我や病気になりその保険を使う場合の手続きを、来日前にルンド大学で指導を徹底してもらった。保険手続きは本人が個人の責任で行うべきものであり、ルンド大学、岐阜大学ともに責任を持つ必要はないということも確認し、参加学生に詳細にガイダンスをしてもらった。

今年度は、最初に記したとおり、大きな病気や怪我がなかったのは幸いであったが、肩を脱臼した学生が1名おり、その学生がまさにこの保険を使うことになった。岐阜大学としては、必要なサポートは行ったが(通院同行、英文診断書取得の手続き補助)、基本的に学生本人が手続きを進め、理想的な対処ができた。今後も、成人である参加学生に、責任ある対応を期待したい。

なお、現時点では保険手続き等の事前指導は、最多数の参加者を派遣するルンド大学のみに限られているが、今後必要に応じて、他の参加学生派遣大学にも働きかけをしていきたいと考えている。

##### ② 自転車貸出の厳密化

期間中学生が滞在する宿舎(岐阜大学学外研修施設、略称学外研)は、大学キャンパスから約8キロ離れた地にある。2007年度までは自転車通学を義務付けていたが、2008年度より安全面に配慮してスクールバスを運行している。このスクールバスは、学生に利用を義務付けているわけではなく、プログラム実施母体である岐阜大学が、参加学生の安全を確保するという目的で運行しているものである(しかし、スクールバスの利用は義務であるという誤った認識が今年度も残存しており、参加学生に混乱を生じさせた)。

通学時の安全対策は講じたが、日々の生活の中での自転車の利用については、我々の目がすべて届くはずもない。昨年度まで、自転車は、全員が必ず必要とする物品(宿舎の部屋の鍵や学生IDカード)とともに無条件で貸出をしていた。しかし、事故の最大の要因ともなっている自転車を、無条件に流れ作業的に貸し出すことは妥当なのか。このような疑問が生じ、今年度は、開講時のガイダンスで、昨年度までの自転車事故の例、

日本の交通ルールや自転車の危険性を説明し、それを了解した者のみ借用書にサインをし自転車を借りるというステップを踏んでもらうこととした。

このような工夫に効果があったのかどうかは不明だが、自転車は借りられて当然なものではなく、交通ルールが異なる地で自転車に乗ることには危険が伴うという自覚をいさかかでも持たせるために、継続していくつもりである。

なお、学生にサインを求めている借用書は、現在は日本語表記のみであるが、次年度は英語を併記し、正確な理解を促すための改善を予定している。

### ③ 交通安全教室への出席義務

上記②とも関連するが、岐阜大学留学生支援室が実施した、全学の留学生を対象として交通安全教室に、サマースクール参加学生の出席を義務付けた。交通安全教室と銘打ってはいるが、地震などの災害時の身の処し方(机の下に避難する等)などについても説明があり、日本で暮らすうえでの安全一般についての知識を得ることができる機会であった。こちらについても効果のほどは不明だが、機会があるごとに自覚を促すことが重要であると考える。

### ④ 災害時避難場所の確認とチューターへの引率依頼

参加学生が滞在する宿舎(岐阜大学学外研修施設、略称学外研)は、平日日中は管理人がいるが、夜間と休日は、参加学生と宿舎チューターのみとなる。もしその時に災害が起きた場合、どう動くべきか。学外研の危機管理マニュアルを入手しようとしたところ、驚くべきことにそのようなものは存在しないことが判明した(本件については、サマースクール云々ではなく、早々に改善が必要であると考え。学外研は、夜間や週末に学生がサークル活動等で利用することも多い施設である。危機管理マニュアルはあってしかるべきではないだろうか)。

マニュアルがないということだったので、サマースクールでは独自に学外研所在地域の避難場所・避難所を調べ、チューターに、事前に避難場所の位置と経路の確認をすることと、非常時に引率することを強く依頼した。今年度は、過去 25 年間と同様、避難場所に赴かなければならないような事態にはならなかった。このような状況が今後もずっと続くことを願うが、それと同時に、何か起きた場合にも十全の対応ができるように備えておく心構えも持ち続けたい。

## V その他

上述の I～IV以外の事柄で、今年度特記しておきたいものについて、以下 5 点列挙する。

### ① JASSO 奨学金

今年度のサマースクールの 8 週間コース参加学生 17 名は、独立行政法人日本学生支援機構(Japan Student Service Organization、略称 JASSO)の「平成 25 年度留学生交流支援制度(短期受入れ)奨学金」を受給することができた。この奨学金は、個々の学生が申請するものではなく、プログラムとして申請し採択されるものであるため、本プログラムの意義が認められたと自負している。昨年度の「平成 24 年度留学生交流支援制度(ショートステイ)」に続いて今年度も採択されたことは喜ばしい。

ただし、今年度は申請基準が厳しくなったことから、本サマースクールが正式な単位として認定される Rund 大学については申請できたが、その他の大学、すなわち 4 週間コース参加の 2 校については申請が難しく、

断念した経緯がある。同じプログラムに参加していながら、奨学金が得られる学生と得られない学生がいることに、我々も心苦しさを感じた。幸い、木浦大学については、海外語学研修が単位認定される制度があることが判明したので、次年度は同奨学金の申請が可能になるのではないかと期待している。

## ② 宿舎チューター

本サマースクールの人気のツートップは、郡上プログラムと宿舎チューターだどつねづね感じているが、今年度も宿舎チューターの貢献は絶大であった。アンケートでも、チューターが学外研にしていることについて、全員が「とても良かった」と回答しており、自由コメントにも彼らに対する絶賛が重ねられている。

今年度は、大きなトラブルがなく、参加学生も比較的小となしかったため、コーディネーターが宿舎チューターと接触する機会が少なく、学生やチューターの詳しい様子が不明で、正直いささか不安に感じていた。しかし、「便りのないのはよい便り」であったようで、歓送会での参加学生とチューターの様子を見て、心配が杞憂であったと安心した。

今年のサマースクール開始前に、宿舎チューターを経験した学生が中心となり、「新旧サマスク会」なる会が催された。これは、今年度のチューターはもとより、過去のチューター経験者(卒業生も含む)、過去のサマースクール参加学生で現在日本にいる者(大学院等に留学中の者、日本企業に就職した者、単に日本に旅行中の者等)が一同に会したものであった。このような会が、チューターたちの自主的な発案で行われたこと、岐阜大学を離れてもサマースクールそして宿舎チューターという絆で若者がつながりつつけていることに、感動に近いものを覚えた。四半世紀を超える歴史を持つことの重みを、再認識した次第である。

しかし、苦言も呈しておかなければならない。プログラム終了時、学外研では大掃除が3回行われる。最初は参加学生が帰国前に行うもの、次はチューターが共用部分やチューター使用部屋を掃除するもの、最後が大学スタッフが参加する仕上げの掃除である。今年度、2回目のチューターによる大掃除が不徹底であるとの報告が上がってきた。ぜひ「終わりよければすべて良し」を目指し、それまで貢献を帳消しにするようなことのないよう心してほしい。

## ③ 宿舎インターネット

2011年度から無線LANを宿舎である学外研で使えるようにしたが、遅い、つなげるのが5台というのは少ないという不満が今年度も続出した。昨年度、一昨年度も書いたことだが、施設の改修ができない現状では、如何ともしてほしい。あまりにも不満が噴出するようであれば、2010年度以前のように、学外研ではネットができないからあきらめよという選択肢もある(最終手段である)。

次年度以降も、同様の不満は続くと思うが、できることとできないことがあることは、現実である。

## ④ 地域住民とのかかわり

毎年度、夏至に至近の週末に、ルンド大学の学生が「夏至祭(Mid Summer Party)」を企画し、岐阜大学スタッフやチューターを招待してくれる。夏至祭はスウェーデンの伝統的な祭で、毎回ルンド大学の学生が料理や歌やゲームなど、趣向を凝らしてくれる楽しいパーティーである。

今年度の夏至祭に、学外研近くにお住まいのご夫妻が立ち寄られた。ルンド大学の学生が、事前に近隣の住宅に、夏至祭のパーティーをすること、騒音についてのお詫び、立ち寄りを歓迎することを書いた手紙を配っていたのである。このようなことは初めてであったので、大変驚き、学生の配慮に感嘆した。訪れたご夫妻と話し

たところ、毎年夏に留学生が学外研に来ることを好ましく思い、仲良くなりたいと考えているが、そのきっかけがないことを残念に思っている、今回はこのような手紙をもらって学外研に来ることができて嬉しいということであった。

学外研近隣の方々へは、サマースクール開始前に留学生センター長が自治会長に挨拶に行っているが、それ以外の交流は、大学としては行っていない。しかし、本プログラムが、学外研近隣の方々にも支えていただいているという当たり前のことを自覚した出来事であった。

#### ⑤ 役員昼食会

岐阜大学サマースクールの意義を、学長はじめ執行部の役員に理解し実感してもらう機会として、2010、2011 年度の 2 回、役員昼食会を実施した。学長、理事、監事、副学長とサマースクール参加学生が、昼食を採りながら歓談する会である。学生と直接話せることを、役員にも楽しんでいただいていたと思う。

しかし、2012 年度にサマースクール経費節減が至上命題となり、本昼食会もそれを理由に実施しないこととした。今年度も実施しなかったのだが、複数のルートから、あの昼食会は良かったのという役員のコメントを得た。来年度は大学執行部が一新されるため、新執行部にサマースクールを知っていただくためにも、役員昼食会を復活させることも考えている。

今年度のサマースクール全般についてのアンケート結果は、「とても良かった:17 名、良かった:2 名」であった(全回答者 19 名)。例年に劣らぬ高い評価を得たことを大変嬉しく思う。今年 3 月にルンド大学を訪問した際に、昨年度のサマースクール参加学生について、嬉しい情報を得た。昨年度のルンド大学からの参加者は 14 名であったが、そのうちの実に 9 名が、この 10 月から一年間の短期留学で再度日本に留学するという(うち 2 名は岐阜大学に留学する)。もしサマースクールが楽しくないものであれば、もう一度日本に行って学ぼうという気持ちにはならないだろう。もともと日本が好きな学生たちがサマースクールに参加してさらに日本が好きになり、もう一度日本へと思う契機となっていることは、サマースクールコーディネーター冥利に尽きる。今年度の参加学生たちが、再度日本に来ることを、そして岐阜、岐阜大学を訪れて「ただいま」と言ってくれることを、楽しみに待ちたいと思う。もちろん、ルンド大学のみならず、木浦大学、ソウル科学技術大学の学生も大歓迎である。

最後にもう一点付け加えたいのは、「ルンド大学スプリングスクール(仮称)」の計画である。ルンド大学の学生を岐阜大学がサマースクールで受け入れているように、ルンド大学で岐大生を受け入れるプログラムを展開してもらえないかという計画である。ルンド大学が学期中で岐阜大学が春休み中である 2 月または 3 月を実施時期に考えている。このようなプログラムに興味があるか、参加したいかを尋ねた学生アンケートを岐阜大学で実施したところ、前向きな返答を多く得た。その集計結果をルンド大学に送付し、現在ルンド大学からの返答を待っているところである。そもそも実施が可能か、可能な場合プログラム内容はどうか、費用や宿舎はどうか等々、検討すべき点は山積みであるが、両校にとって、そして学生にとって有意義な方向に進めるために微力を尽くすつもりである。

今年度のサマースクールも、多くの方々に支えられて、無事全日程を終えることができました。エクスカージョンでお世話になった郡上、美濃、土岐の皆様にはお礼を申し上げますと同時に、今後も変わらぬご支援・ご協力

## 2013 岐阜大学サマースクール 総括と課題

を心よりお願い申し上げます。

サマースクール参加学生に本物を体験させるために、ワークショップをお願いしている能の味方團先生・田茂井廣道先生、狂言の山口耕道先生・茂山良暢先生には、今年度も快くお引き受けいただきました。どうもありがとうございました。

サマースクール参加学生が居住する学外研(学外合宿研修施設)では、管理人岩松明美さんにお心配りをいただき、12名の宿舎チューターズ、3名のサポーターズには友人として、相談相手として、模範として、活躍してもらいました。また、3月に訪問したルンド大学では、日本語学科の先生方をはじめスタッフの皆様にも、大小取り混ぜたトピックで納得いくまで話し合いをさせていただきました。お世話になった皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

来年度のサマースクールも、参加学生が満足を得られるものを提供できるよう、祈念して稿を終えたいと思います。(文責:サマースクール受入コーディネーター土谷桃子)



2013 年度 岐阜大学サマースクール(受入) 日程表

	行事	日本語クラス		行事	日本語クラス
6/3 M	8週間コーススタート		6/30 S		
4 Tu			7/1 M		◎
5 W	8週間コース開講式・ ガイダンス・歓迎茶話会		2 Tu		◎
6 Th	日本語授業開始	◎	3 W		◎
7 F			4 Th	1泊旅行(～5)	
8 Sa			5 F		
9 S			6 Sa		
10 M		◎	7 S		
11 Tu		◎	8 M	ホームステイガイダンス、筆 記試験	◎
12 W	交通安全教室	◎	9 Tu		◎
13 Th	美濃エキスカンション	◎	10 W	狂言ワークショップ <sup>o</sup>	◎
14 F			11 Th		◎
15 Sa			12 F	郡上プログラム(～15)	
16 S			13 Sa		
17 M		◎	14 S		
18 Tu		◎	15 M	(海の日)	
19 W	能ワークショップ <sup>o</sup>	◎	16 Tu		◎
20 Th		◎	17 W	相撲講義	◎
21 F			18 Th	相撲観戦	◎
22 Sa			19 F		
23 S			20 Sa		
24 M	土岐エキスカンション	◎	21 S		
25 Tu		◎	22 M		◎
26 W	4週間コース開講式・ ガイダンス	◎	23 Tu	日本語授業最終	◎
27 Th		◎	24 W	まとめの会・修了式・ 歓送会	
28 F			25 Th	宿舎大掃除	
29 Sa	4週間コース学生 歓迎パーティー				

